

『母という絶対的存在』

浅田志津子（教育・福祉関係のルポライター）

二児の母になって、早二ヶ月が過ぎた。おとといから田舎の母が来てくれているのだが、専業主婦歴45年の母は、家事も育児も徹底していて、いつもなにかしらやっている。今も、少しは休めばいいのに赤ちゃんの肌着を縫っている。そんな母を見つめながら、私は母のような母親になれるだろうかと思う。

ふりかえれば、子どもの頃から、私は母を「一個人」としてとらえたことがなかった。母に子ども時代があったことさえ信じ難く、生まれたときから、姉と兄と私の「母」として存在しているような気さえる。いつもエプロンをした母が、スーツを着て会社で働く姿なんて想像もつかないし、もちろん、母に「女性」を感じたことなんて一度もない。

私が知る母は、浅田〇子というひとりの人間の一部分であるという当然といえば当然の事実気づいたのは、大人になってからだ。それほど、母を「絶対的な存在」として感じて生きてこられたのは、母が常に私の前で「母の顔」を保ちつづけてくれたからだ。そして、それがかなり大変なことも。

今の小・中学生には母親を客観視している子が少なくない。現代の子どもが昔より早熟だからだろうか。それとも、「一個人」として、または「女」としての自分自身を子どもに隠さない母親が増えたからだろうか。母子家庭の小学生が「ママの新しいカレシがさ～」とすまして言ったり、共働き家庭の中学生が「お母さんは家事はしないけど、そのぶん稼いでるから、まあ、いいんじゃない」などと答えるのを聴くたびに、母子の関係もずいぶん変わったなと思う。ある意味、友達のような対等な関係になっているのだろうか。

私自身、二児の母になった今も、「一個人」としての自分を大切にしたい気持ちは確かにある。でも、子ども達の前では、できるかぎり「母の顔」を最優先して、子ども達にとって絶対的な、どっしりと安定した存在でありたい。老いた母の背を見つめながら、そう感じている。

『子どもとの旅』

中館 慈子

お子様連れで列車、飛行機での遠距離旅行をすることもあると思います。大きな荷物とじっとしていない子どもたち、ご両親はたいへんです。以下はちょっと気づいたことです。

着替えなどの荷物は宅配便を利用してできるかぎり送ってしまいましょう。飲み物、おやつを含めた最低限の荷物にします。

母乳の場合はミルクが要なくて、荷物が少なくてすみませんが、授乳の場所に困るもの。胸を隠す大きなスカーフなどあるとよいようです。ミルクの場合は小分けになった粉ミルク、哺乳瓶に使い捨てのパックをセットした「洗う手間なしの哺乳瓶」もあります。

忘れてはならないのが道中お子様の楽しめる物。幼児は長時間ただ座っていることは苦手です。かさばらない小さな絵本を何冊か持って行くことをお勧めします。仕掛け絵本、シールをはれる絵本、塗り絵なども喜びます。少し重いのですが、飛行機の旅を度々するある家族では、ポータブルDVDプレイヤーを愛用しています。これで長時間の飛行機の中でも万全！

もちろん、列車の車窓から見える景色は最高のドラマですね。

赤ちゃんやお子様連れでも、楽しい家族旅行の思い出を作ってください。

子どもがことばを話し始める時

カーサクラブ英会話講師 市橋理恵子

「ねえ、わらって のど渴いたっていうことでしょう？」

アメリカに引っ越しをして、現地の幼稚園に通い始めて6ヶ月ほど。ようやく泣かずに通園できるようになった矢先、5歳の娘が突然私に聞いてきた。

「んんん、わらを食べたらのど渴くかな…」とあいまいな返事をする、

「違うよ、英語のワラだよ！」と娘。そこでやっと「ワラ」は”water” のことと気がついた。

「みんな、『アイ ワラ』って言って水飲みに行くんだよ。」

と得意げに説明してくれた。日本の保育園での「先生、のど乾いた！」の状況がアメリカでは“*I want water!*” だったのだろう。辞書をいくら引いても出てこない翻訳だ。

分からないことばの洪水の中から、娘はようやく少しずつ英語のことばを拾って、状況から自分なりに意味を対応させ始めたのだ。先生からも娘がしゃべり始めたと報告があったばかりだ。

そうだ、こうやって子どもはことばと出会い、いろんな場面でいろいろな組み合わせでことばを浴びるうちにことばの概念を練り上げ、理解していくのだ。そしてそれがある程度蓄積してきて初めてことばをしゃべり始めるのだということ、改めて認識した。ヘレン・ケラーが初めて学んだことばも“water” だったわけ。私はあえて、「“water” は『水』のことだよ」とは言わずに、

「そうなんだ、のどが乾いた時は“*I want water*” っていうんだ。」と答えた。

小さな子どもたちに英語を教えるとき、私はできるだけ自然な英語の中から子どもたちが自分なりにことばを拾い、理解していく過程を大切にするように心がけている。柔らかい脳を持つ子どもたちだからこそできる学習方法だと思うからだし、ぐちゃぐちゃとしたことばのパズルがすっきりとはまって「わかった！」という時の、子どもたちの目の輝きを見るのが何よりの楽しみだからだ。

あれから十数年、バイリンガルに育った娘は今、英語の試験の和文英訳で意訳をしすぎて減点をされては「こんな変な言い回しはしない」と憤慨している。

『薬を出さない小児科』

浅田志津子（教育・福祉関係のルポライター）

…風邪をひいた。4日前の夜、3歳の長女がときどき乾いた咳をしたので嫌々な予感がしたのだが、翌日の午後には、もう大量の鼻水、涙目で、小児科に連れていった。帰り道では、既に私ののどに不快感がある。幼子二人を抱えてダウンするわけにはいかないので、薬局に寄って市販の風邪薬を買った。だが説明書を読んだら、授乳中の人には飲むのをひかえるようにとの注意書きがあり、飲むのを断念。その日の夜には、私が涙目、鼻水となり、翌日には主人が感染した。かくして我が家は「鼻がみ家の一族」となり、家中にティッシュの箱が転がっている。

おとといの夕方、長女が8度の熱を出した。小児科でもらったのは風邪の症状を緩和する薬だけだったので、熱冷ましの処方箋も出してもらおうと再度小児科に行ったら、先生が渋い顔をして言った。

「解熱剤は、あまり出したくないんだよねえ…」

いわく、解熱剤は上がった体温を無理やり薬の力で下げるものだから、子どもの体には負担が強いし副作用もある。9度を超える熱がつづくようなら飲ませたほうがいいけれど、8度ほどなら、まだ飲ませないでいいのでは、とのことだった。不安気な私の心中をくんでか、「9度を超えたら出すから」と言ってくれ、結局、そのまま帰宅した。

夕飯のとき、夫と話しながら、たしかに私を含め、今の母親は子どもにすぐに薬をあたえがちなかと思っただけ。少しでも早く楽にしてあげたい、そして自分も安心したい、というのが一番の理由だろうが、仕事を休めないといった親側の事情もあるだろう。朝、熱がある子どもに解熱剤を飲ませて、なにも言わずに子どもを保育園に預けていく親が多い話もよく聞く。親も胸を痛めながら、やむなくそうしているのだろうが…。

幸い、娘の熱は9度を超えることはなく、私も高熱にはいならず、快復にむかっている。あのとき先生が薬を出さなかったおかげで、すぐに薬に頼るこれまでの習慣を改めるきっかけができ、感謝している。

2009年3月号

『上の子のいとしさ』

浅田志津子（教育・福祉関係のルポライター）

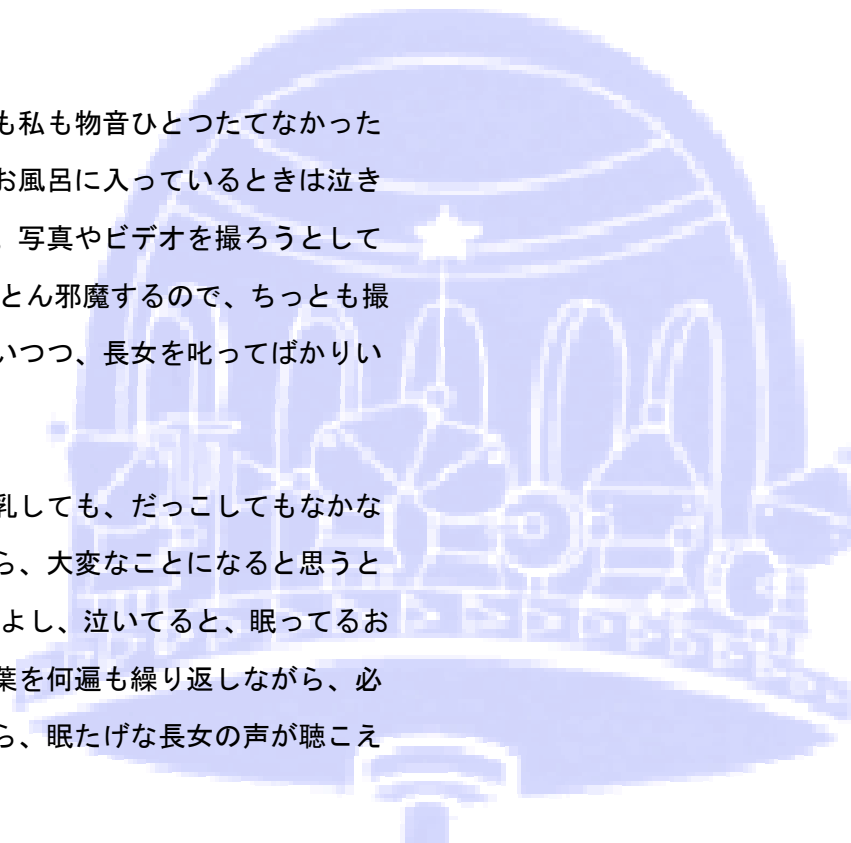
3歳の長女が家のなかで騒いだり、叫んだりするたびに、「おりちゃん（次女の愛称）が起きちゃうでしょっ」と、一日に何度も叱りつける日々である。長女は怒られるとさらにムキになって、「キーッ」と高音の奇声を発する。そのせいで眠っていた次女は泣きだすし、激怒する私に長女も泣きだすという、このどうしようもない悪循環…。

まだ赤ちゃんだった長女が寝ていたときは、夫も私も物音ひとつたてなかったというのに、次女はこの騒音に耐え、私が長女とお風呂に入っているときは泣き叫んでもほっとかれ、つくづくかわいそうである。写真やビデオを撮ろうとしても、長女が「(自分が) やる、やる」といってとことん邪魔するので、ちっとも撮れない。そんな思いがつのって、教育に悪いと思いつつ、長女を叱ってばかりいる。

先日の夜中のこと。次女の夜泣きがひどく、授乳しても、だっこしてもなかなか泣きやまない。隣で眠る長女が起きてしまったら、大変なことになると思うと気が気でなく、だっこしながら、「ほらほら、よしよし、泣いてると、眠ってるお姉ちゃんが起きちゃうよ～」と、普段とは逆の言葉を何遍も繰り返しながら、必死で寝かしつけていたときのことだ。暗闇の中から、眠たげな長女の声が聴こえた。

「ママァ、おりちゃん、泣いててもいいよ。さっちゃん、平気だよ」

いつもとは反対のことを言っている私の言葉が、聴こえていたのだろうか。ちょっとびっくりして、長女をまじまじと見つめてしまった。起きださないよう、布団をかけなおそうとすると、「おりちゃん、おっばい…」と、半分眠りながら私に言う。「うん、あげるから」と答えながら、長女の、そのお姉ちゃんぶりに少し泣きそうになった。約1時間後、ようやく眠った次女をそっと布団に戻してから、隣の長女が眠る布団に入り、久しぶりに長女を抱きかかえて眠った。次女よりもずっと大きいぶん、あったかかった。



2009年4月号

『ありふれた奇跡』

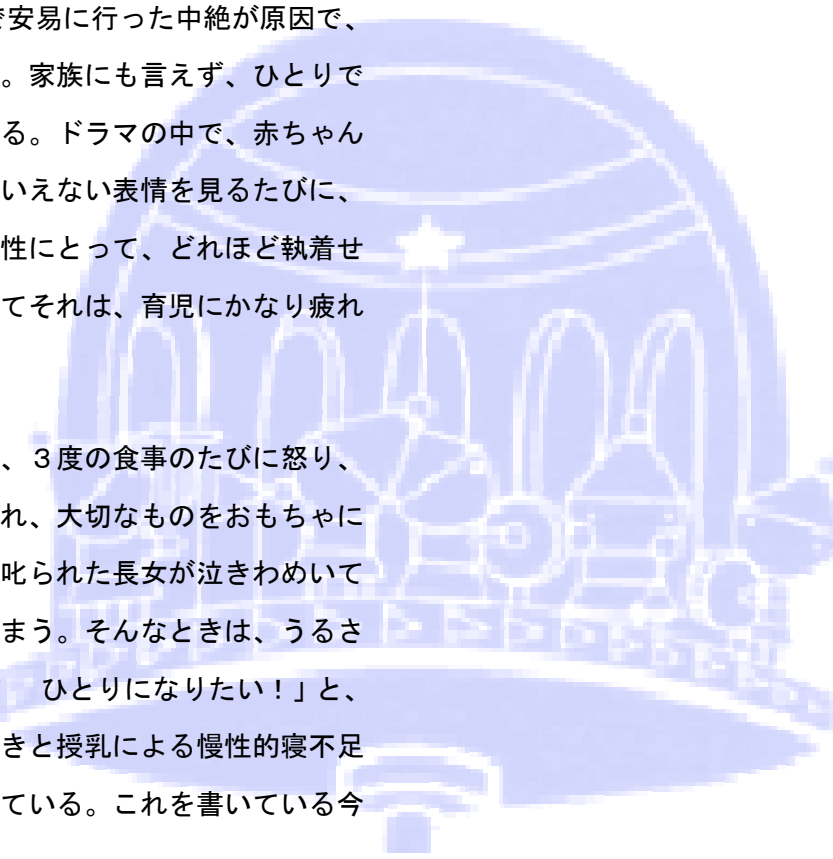
浅田志津子（教育・福祉関係のルポライター）

「ふぞろいの林檎たち」などの名作で知られる、脚本家・山田太一氏の最後の連ドラ「ありふれた奇跡」が、先月、終わってしまった。私にとって、これほど「いいドラマ」はこの10年なかった。

ドラマの主人公、加奈（29歳）は、かつて外国で安易に行った中絶が原因で、子どもが産めない身体になってしまった女性である。家族にも言えず、ひとりでその傷を抱え、自分を責めて死のうとしたこともある。ドラマの中で、赤ちゃんや子どもを連れた女性を見つめる加奈の、なんともいえない表情を見るたびに、「母親」という立場が「なりたいけどなれない」女性にとって、どれほど執着せざるをえない幸福であるかをリアルに感じた。そしてそれは、育児にかなり疲れている今の私にとって、なによりの薬だった。

もちろん、子どもはかわいい。けれど、毎日毎日、3度の食事のたびに怒り、部屋を片づけるそばから散らかされ、あちこち汚され、大切なものをおもちゃにされたり、壊されたり…。全然言うことを聞かず、叱られた長女が泣きわめいていると、眠っていた5か月の次女まで泣き出してしまう。そんなときは、うるさくてうるさくて気が狂いそうで、「ああ、もう嫌っ！ ひとりになりたい！」と、切実に心の底から思う。たぶん、次女の深夜の夜泣きと授乳による慢性的寝不足もあるのだろうが、最近の私は、本当に育児に疲れている。これを書いている今も、パソコンで遊びたがる長女と格闘している…。

ドラマはいつもビデオ録画して、長女が夕寝するつかの間の静寂なひとときに、次女をだっこしながら観た。観終わると、しばらくその余韻にひとりながら、次女のずっしりとした重みとぬくもりを味わう。そっと襖をあけて和室で眠る長女を見つめると、普段はただただ、うるさくて手がかかる存在なのに、たまらなくいいとおしい。DVDが絶賛発売中なので、ひとりでも多くのママに、ぜひ観てもらいたい。



2009年5月号

『娘の集団生活デビュー』

浅田志津子（教育・福祉関係のルポライター）

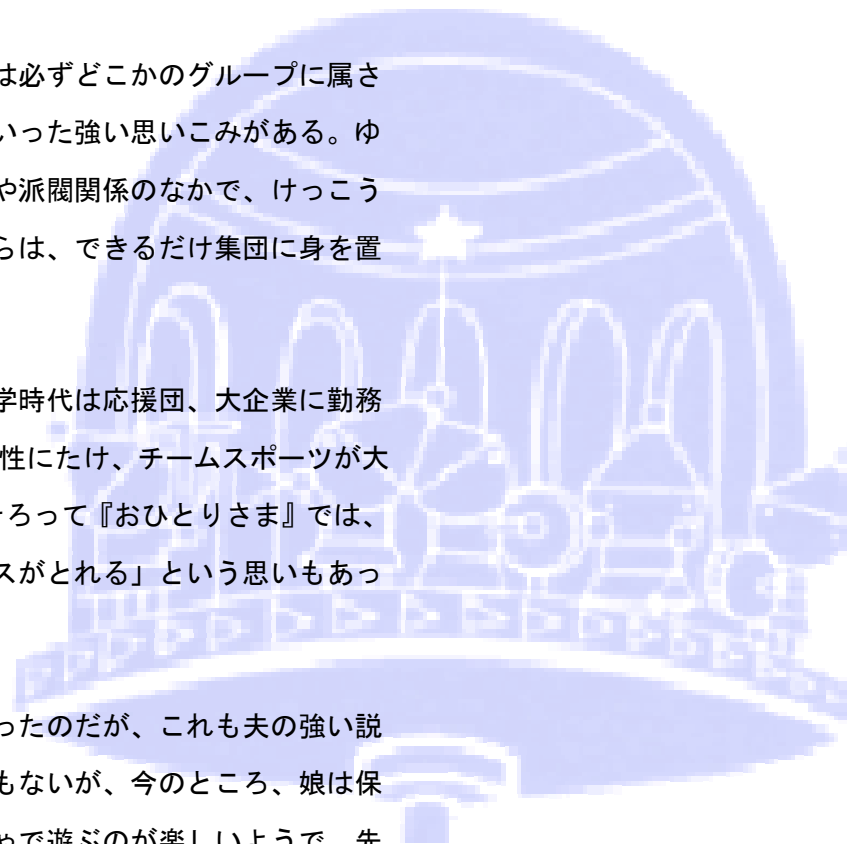
私は、自他共に認めるマイペース人間である。といっても人づきあいが嫌いというわけではなく、1対1の人間関係は、むしろ好きなほうだ。だから、さまざまな人に個別に会って話を聴くライター業は天職だと思っている。けれど、集団で群れるのは好きじゃない。「人間5人集まれば、必ずなにかしらもめる」と思ってしまう悲観的なところがある。

私もふくめて、多くの女性には「集団のなかでは必ずどこかのグループに属さなければ」「ひとりでいるのはみっともない」といった強い思いこみがある。ゆえに、学生時代は女子特有のグループごとの対立や派閥関係のなかで、けっこう嫌な思いもしてきている。だから、社会に出てからは、できるだけ集団に身を置かず、すむ生き方を選んできた。

いっぽう、夫は小・中・高校は野球三昧で、大学時代は応援団、大企業に勤務と、こてこての「集団OK人間」だ。気配りと協調性にたけ、チームスポーツが大好きである。迷わず結婚を決めたのには、「夫婦そろって『おひとりさま』では、子どもの教育にもよくない。この人とならバランスがとれる」という思いもあったからだ。

先月から3歳半の長女が保育園に通うことになったのだが、これも夫の強い説得があって実現にいたった。まだ、通い始めてまもないが、今のところ、娘は保育園通いを嫌がっていない。園庭の遊具やおもちゃで遊ぶのが楽しいようで、先生いわく、全然、泣くこともないそうだ。

ほっと安心したのもつかの間、園で写ったのか、2週目にひどい風邪を引いた。3日休んで治り、また通いはじめたら、今度は熱がつづき、結局、一週間休んだ。新しい環境に慣れるのには、やはり時間がかかりそうである。あせらずにゆっくりと、娘の集団生活デビューを見守っていきたい。そして、どんなに家の外でつらいことがあっても、帰宅すれば明るい気持ちになれるような、楽しい家庭を築いていきたい。



2009年6月号

『子どもの友達』

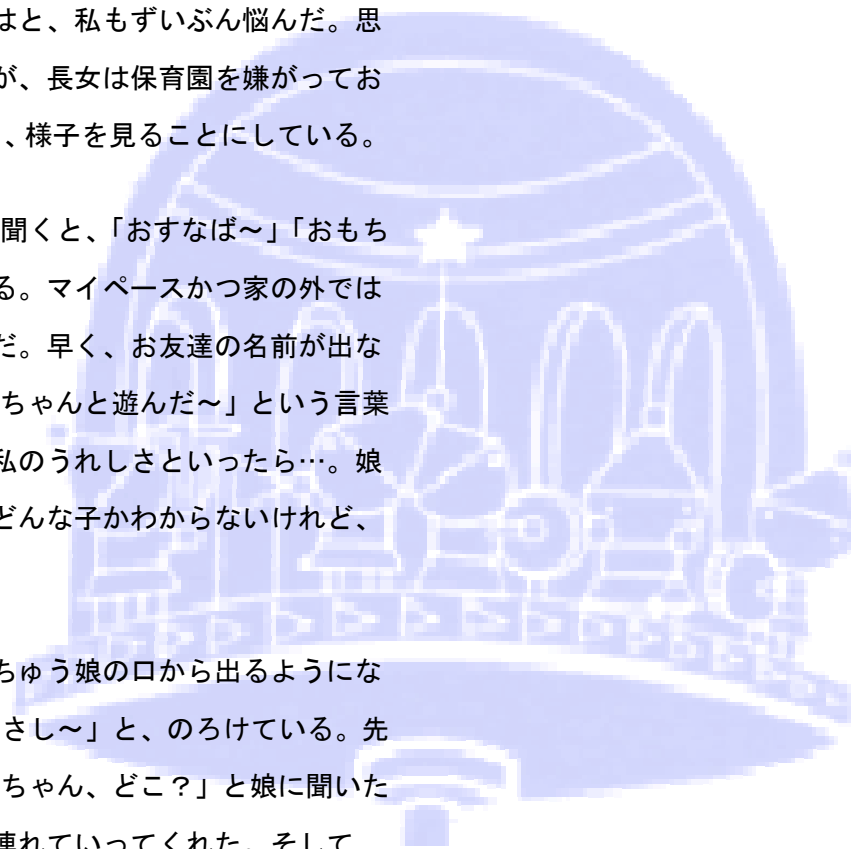
浅田志津子（教育・福祉関係のルポライター）

長女が保育園に通い始めてからのこの2か月は、咳がなかなか完治しなかったり、突然、発熱したりで、結局、月の半分は休んだ。「集団生活が始まったら、最初の1年はウイルスとの戦い」とは聞いていたが、これほどとは思わず、病気以外にもストレスなどの精神的な負担が強いのではと、私もずいぶん悩んだ。思い切って、ひと月ほど休園させようかとも思ったが、長女は保育園を嫌がっておらず、むしろ行きたがっているのもうしばらく、様子を見ることにしている。

帰宅後、「今日は保育園でなにをしたの？」と娘に聞くと、「おすなば〜」「おもちゃ〜」、「ちゅべりだい」など、うれしそうに答える。マイペースかつ家の外では内弁慶な娘なので、ひとり遊びの時間が多いようだ。早く、お友達の名前が出ないかなあと思っていたら、ようやく先月末、「〇〇ちゃんと遊んだ〜」という言葉が、ぽろりと娘の小さな口から出た。そのときの私のうれしさといったら…。娘の送り迎えは主人がしているので、〇〇ちゃんがどんな子かわからないけれど、きっと面倒見のいい子なんだろうなあと思った。

それから、その〇〇ちゃんの名前が、しょっちゅう娘の口から出るようになり、「〇〇ちゃん、だいしゅき〜 かわいい〜 やさし〜」と、のろけている。先日、主人に代わってお迎えにいったときに、「〇〇ちゃん、どこ？」と娘に聞いたら、娘が私の手をもって、〇〇ちゃんのところ連れていってくれた。そして、はじめて、〇〇ちゃんがダウン症であることを知った。

「〇〇ちゃん、いつもさっちゃんとお遊んでくれてありがとうね。さっちゃんはね、〇〇ちゃんのことを大好きだって」ひざをついて、ゆっくりとそうつたえたら、メガネの奥から、なんともいえない優しいまなざしで見つめられ、思わず両手で抱きしめてしまった。こんなにも強く、人の子を愛おしく感じたのは初めてで、娘をつうじて、私も成長していくんだなあと思った。



2009年7月号

『姉妹というもの』

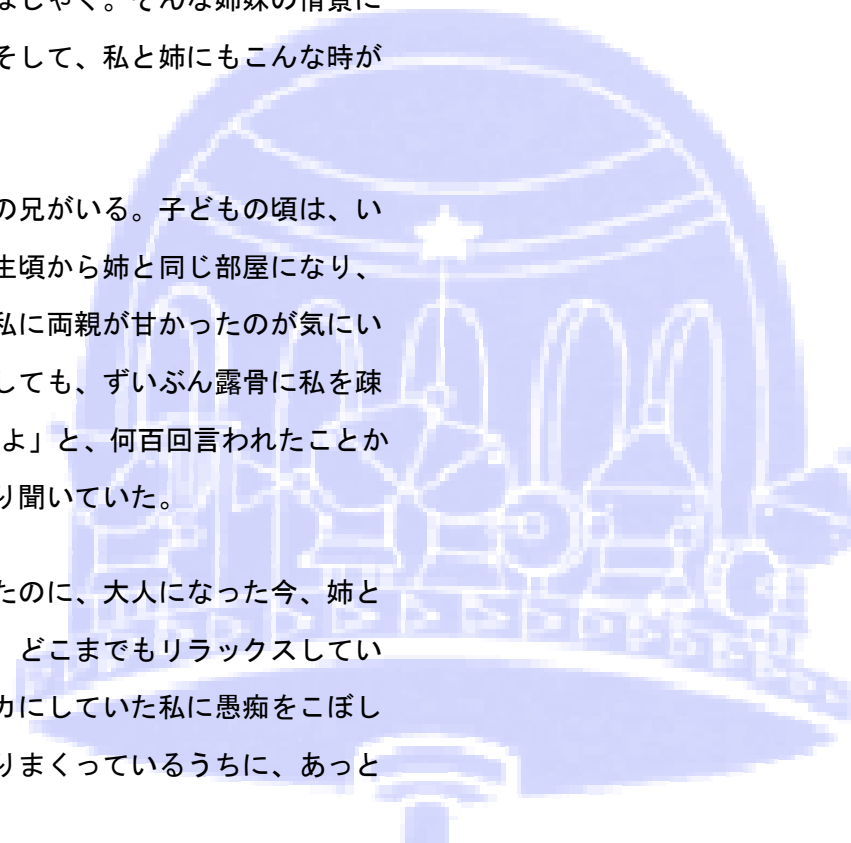
浅田志津子（教育・福祉関係のルポライター）

3歳半の長女と8か月の次女が、いっしょにたわむれて遊ぶようになってきた。といっても、次女はおでぶちゃんすぎて、まだお座りもできないので、長女が次女のむっちり手足をもって揺らしたりしている。次女がきゃっきゃと笑うと、「ママ～、おりちゃん、笑ってるよ」と、長女もはしゃぐ。そんな姉妹の情景に家事をする手を休めて、しばし見とれてしまう。そして、私と姉にもこんな時があったのだろうかと思う。

姉とは5歳離れていて、しかも間には私と年子の兄がいる。子どもの頃は、いつも兄と遊んでいて、姉とは少し遠かった。6年生頃から姉と同じ部屋になり、親しくなったかというところでもない。末っ子の私に両親が甘かったのが気にいらなかったのだろうか、当時の姉は、今、思いだしても、ずいぶん露骨に私を疎んじていたと思う。「うるさいから、あっち行ってよ」と、何百回言われたことが…。私も私で、そんな姉にたいして憎まれ口ばかり聞いていた。

そんな、決して仲がいいとは言えない姉妹だったのに、大人になった今、姉ときどき会うとけっこう楽しい。友人とはちがい、どこまでもリラックスしている自分がある。姉も、かつては子ども扱いしてバカにしていた私に愚痴をこぼしたり、相談してくる。ご飯を食べながら、しゃべりまくっているうちに、あっという間に数時間が過ぎてしまう。

かつては同じ家の同じ部屋に帰っていた姉と私だが、今は電車で4時間の離れた場所に住み、それぞれの家族が待つ家へと帰る。新宿駅で「じゃあね、バイバイ」とあっさり言って、異なるホームへと歩きはじめ、階段付近で姉の行ったほうをなにげなく見ると、姉も雑踏のなかで、私のほうを見ていたりする。そんなときは、姉へのいとおしさがこみあげて、一瞬、視界がぼやけたりする。「今、私は妻でも母でもなく、妹の顔をしている」と思いながら手をふる。そして手をふる姉も、姉の顔をしている。



2009年7月号

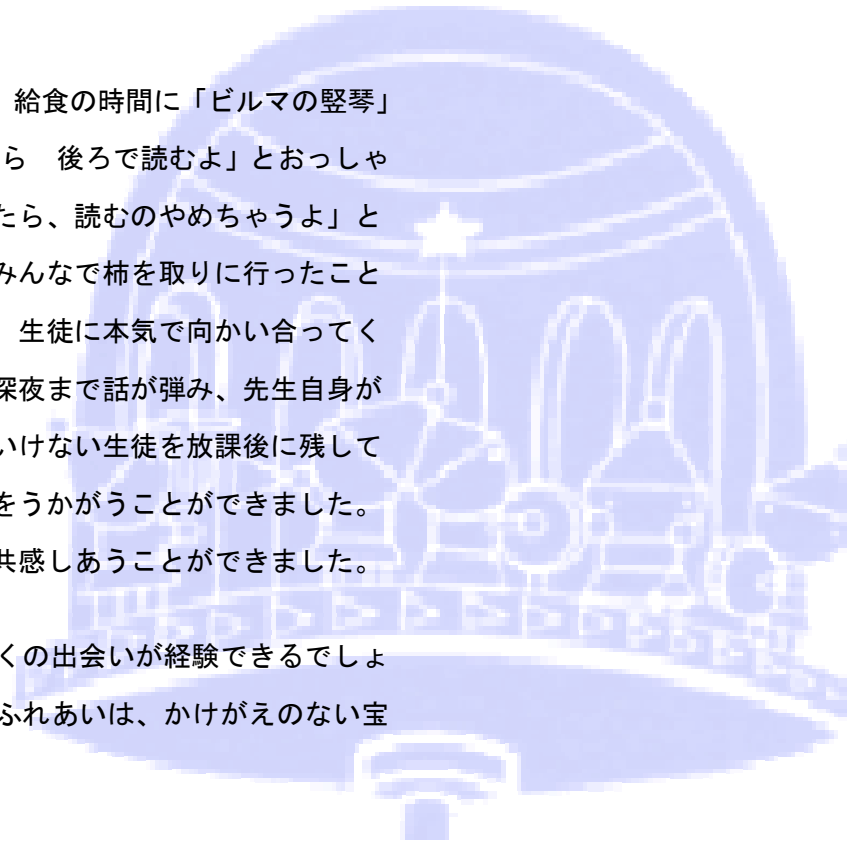
『小学校時代の宝物』

中館 慈子

7月の週末、小学校のクラス会がありました。2年おきに延々と続けられてきたのは、超几帳面な幹事が、計画を立て、案内の往復はがきを出し、その返信の内容と住所録をパソコンで打ち、クラス会の写真を数枚同封し、クラス全員に配布するという涙ぐましい努力を続けているおかげです。60人以上いたクラスメイトの中で住所不明者は数名しかいません。

もうひとつ忘れてならないのは、先生の魅力です。給食の時間に「ビルマの豎琴」を読んでくださったときに、「オレ 泣いちゃうから 後ろで読むよ」とおっしゃったことを私が話すと「覚えているよ。後ろ向いたら、読むのやめちゃうよ」と言ったよね、と先生。秋になると先生の家の中にみんなで柿を取りに行ったこともありました。小学4年から6年の担任でしたが、生徒に本気で向かい合ってくださいましたことをしっかりと覚えています。今回は深夜まで話が弾み、先生自身が胸に秘めていたいろいろな経験談、授業についていけない生徒を放課後に残して個人指導をしたら上司に叱られた話など・・・、をうかがうことができました。傘寿の先生と還暦を過ぎた生徒。大人同士として共感しあうことができました。

今はクラス替えも多いとのこと。それはそれで多くの出会いが経験できるでしょうが、持ち上がりのクラスの先生と生徒の親密なふれあいは、かけがえのない宝物のように思えます。



2009年8月号

『あとどれくらい』

浅田志津子（教育・福祉関係のルポライター）

毎年、夏は子連れで伊豆の実家に帰省する。特急の「踊り子」を使えば、埼玉の大宮から伊豆の下田まで、乗り換えなしで3時間ちょっとで着くのだが、我が家はいつも約5時間かけて、在来線乗り継いでいく。浮かせた特急代で、親へのお土産とお弁当とお菓子を買う（飲み物は持参）。東海道線と伊豆急行線のボックス席を陣取り、のんびりと車窓を味わいながらいくのだ。

車窓から海が見える熱海あたりから、ママとして生きる日頃の自分が少しずつ遠ざかり、娘の顔になって、遠い日の情景を思い出す。小学生の頃の私は、長い髪を三つ編みにして、母が縫うワンピースを着た、海沿いの町に住む、日に焼けた少女だった。あの頃は商店街がまだまだ元気で、百円の御駄賃がうれしくて、しょっちゅう肉屋や八百屋にお使いに行った。そして、お店のおじちゃん、おばちゃんも、子どもひとりのお客には、「お使い、えらいねえ」と飴やキャラメルをくれた。

実家に着くと、母が満開の笑顔で迎えてくれる。七十を過ぎてから、母はずいぶんと老けてしまった。太っていた50代の頃より10キロ近く痩せたこともあり、なんだか年々、小さくなっているような気がする。ひざベルトや虫眼鏡を愛用する母は、元気だけれど、もう、完全に老人なんだと思う。

お茶を飲んだあと、私は二階に上がって少し休む。夕寝から覚めて下に降りていくと、縁側で、母と娘が笑いながら、野菜の皮をむいている。

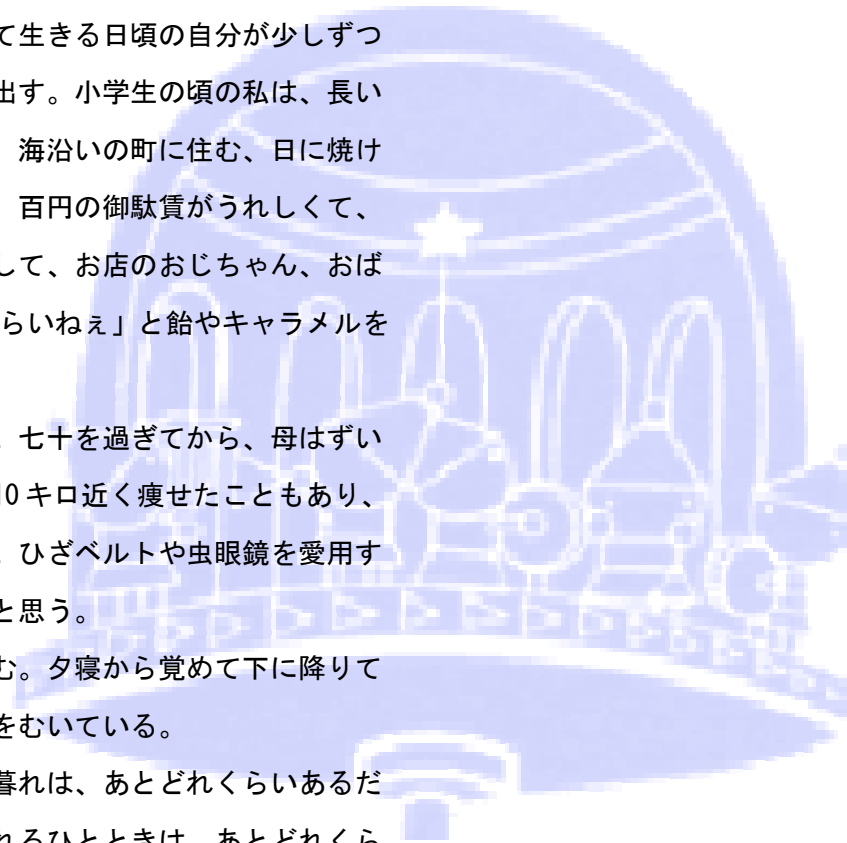
二人の背を見つめながら、母が孫娘と過ごす夕暮れは、あとどれくらいあるだろうと思う。わたしがこうして、ママから娘に戻れるひとときは、あとどれくらいあるのだろうと、思いながら母の背を見ている。

「ああ、お腹すいた。お夕飯なあに」

三つ編みの頃と変わらない口調で、縁側の母の背に声をかける。

「しづちゃんが好きなグラタンよ」

母が、皮をむきながら言う。



2009年8月号

『ことばのはじめ』

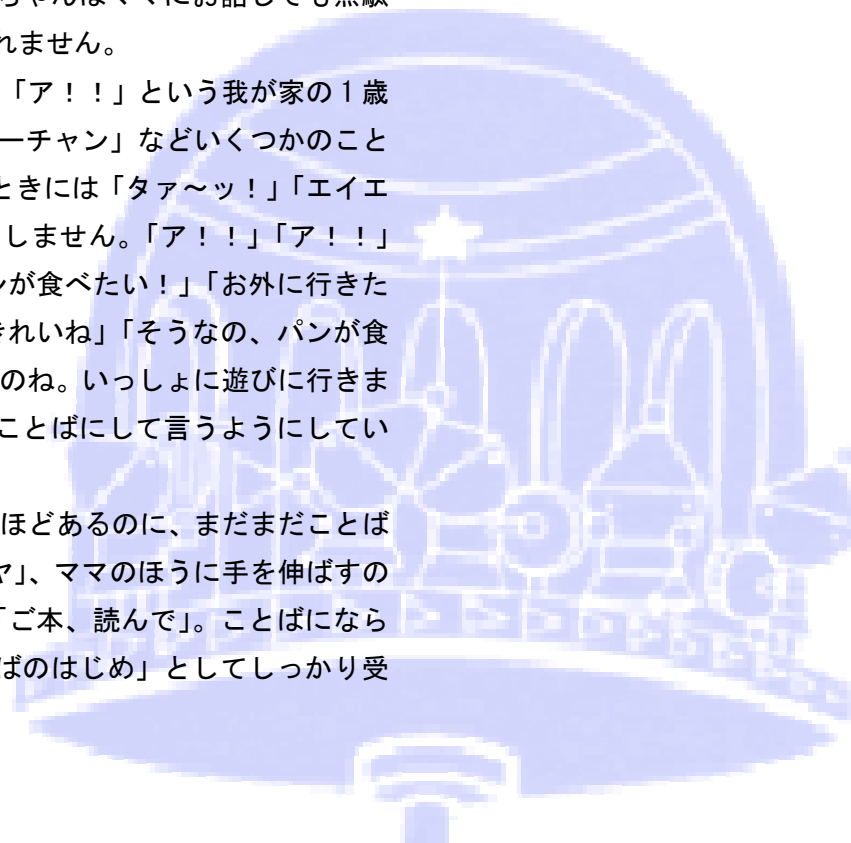
中館 慈子

お子さんが初めて話したことばは何でしたか？ 「ママ」だろうか？ 「パパ」だろうか？ と楽しみにしていたご両親、意外とママでもパパでもなくて、10ヶ月くらいのときに「コレッ！」「ワンワン！」「キンギョ！」「デンチャ！」など思いがけないことばを初めて言ったという方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

大好きな人とコミュニケーションをとりたいという意欲からことばが生まれます。ママが携帯メールに夢中になっていると、赤ちゃんはママにお話しても無駄だということを感じて、あきらめてしまうかもしれません。

小さな指で指差しをしては大きな声で「ア！！」「ア！！」という我が家の1歳1ヶ月の女の子。「ドージョ」「ハアーイ！」「ジョーチャン」などいくつかのことばは言えますし、お兄ちゃんと戦いごっこをするときには「タァ〜ッ！」「エイエイ！」などとは叫びますが、まだ発音がはっきりしません。「ア！！」「ア！！」「ア！！」はそれぞれ「お花を見つけた！」「パンが食べたい！」「お外に行きたい！」と言っているのでしょう。「そうね、お花きれいね」「そうなの、パンが食べたいのね。あげましょねえ」「お外に行きたいのね。いっしょに遊びに行きましょね」というように彼女の思いをできるだけことばにして言うようにしています。

「わかっていること」「言いたいこと」が溢れるほどあるのに、まだまだことばに出して言えない時期。手で払いのけるのは「イヤ」、ママのほうに手を伸ばすのは「ママのところに行きたい」、本を指差すのは「ご本、読んで」。ことばにならないことばですが、こんなジェスチャーを「ことばのはじめ」としてしっかり受け止めたいと思っています。



2009年9月号

『赤ちゃんの日光浴』

中館 慈子

こんな話を聞きました。イタリア在住のそのお母さんは、生後2週間の赤ちゃんに新生児黄疸が出たとき、かかりつけの医師に「海辺の太陽の光線を積極的に浴びさせてください。」と言われたというのです。新生児に海辺の日光浴？ あまりにも無茶なのではないかと思いました。

日本でも光線療法と言って、赤ちゃんに人工的な光線を当てることにより、血液中のビリルビンを変化させて、体から排出する治療があると聞いています。しかし、海辺の紫外線は赤ちゃんにはあまりにも刺激が強すぎるのではないのでしょうか・・・？

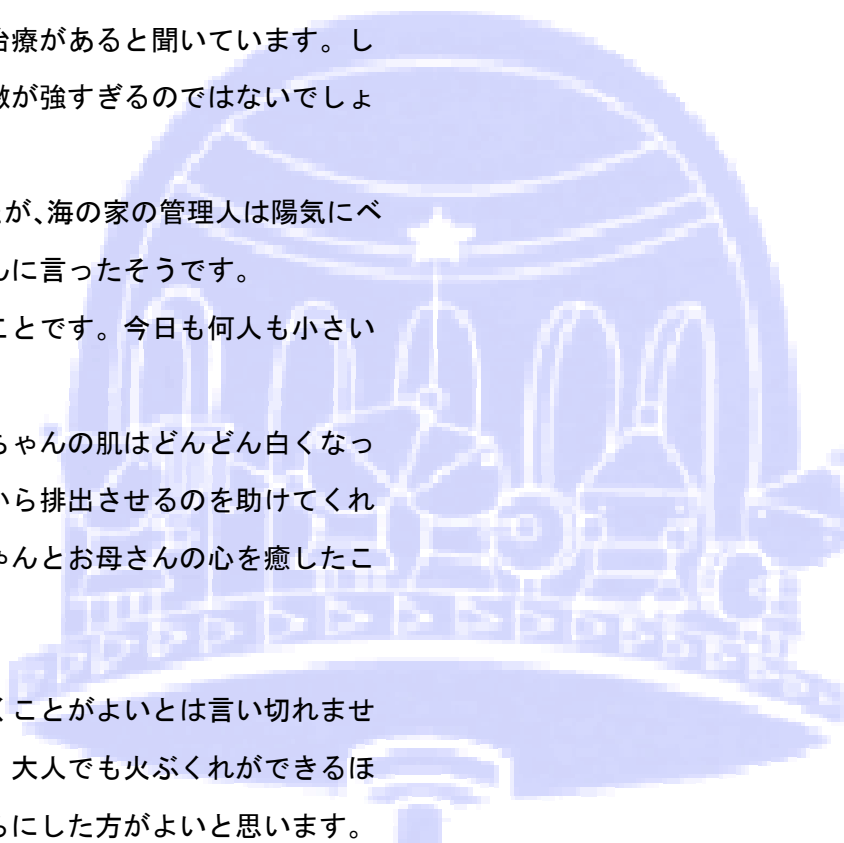
6月のイタリアの海辺はまだ閑散としていましたが、海の家管理人は陽気にベビーカーの赤ちゃんに笑いかけると、そのお母さんに言ったそうです。

「赤ちゃんに海辺の光を当てることはとてもよいことです。今日も何人も小さい赤ちゃんが来ていますよ。」

パラソル越しの6月の優しい太陽を浴びて、赤ちゃんの肌はどんどん白くなっていったそうです。天然の光線がビリルビンを体から排出させるのを助けてくれたのでしょう。波の音、抜けるような青空も赤ちゃんとお母さんの心を癒したことでしょう。

とはいうものの、日本で新生児を海に連れて行くことがよいとは言い切れません。たとえば夏の湘南の海の紫外線はとても強く、大人でも火ぶくれができるほどです。赤ちゃんの海水浴は早くても1歳過ぎからにした方がよいと思います。それも万全の日焼け対策を忘れずに、短時間から・・・。

9月に入って、日差しがやわらかくなってきました。赤ちゃんをベビーカーに乗せて、外気浴をするのによい季節になってきました。日焼け止めや虫除けも忘れずにお出かけ下さい。木漏れ日、木々のそよぐ音や鳥のさえずり、澄んだ空気を感じながら、そして少し色づいてきた木の葉が揺れるのを見つめながら、赤ちゃんは自分が自然の一部であることを感じ、のびやかに育つ力を養われることでしょう。



2009年9月号

『たくさんの不思議』

浅田志津子（教育・福祉関係のルポライター）

先 子連れで十日間、伊豆の実家に帰省し、無事に戻ってきた。帰省中は、子ども達は親に押しつけて、ひとりの時間を満喫しようという野望もあったが、そうもいかず…。父も母も、趣味の活動やボランティアで忙しく、ほとんど毎日、外出してしまうのである。

かつては、そんな両親に不満を感じることもあった。でも、親が70を過ぎた頃から、「親もあと何年生きられるかわからない。元気なうちにしたいことをして、余生を存分に満喫してほしい」と思えるようになった。子どもだけでなく、私も少しは成長しているのである。

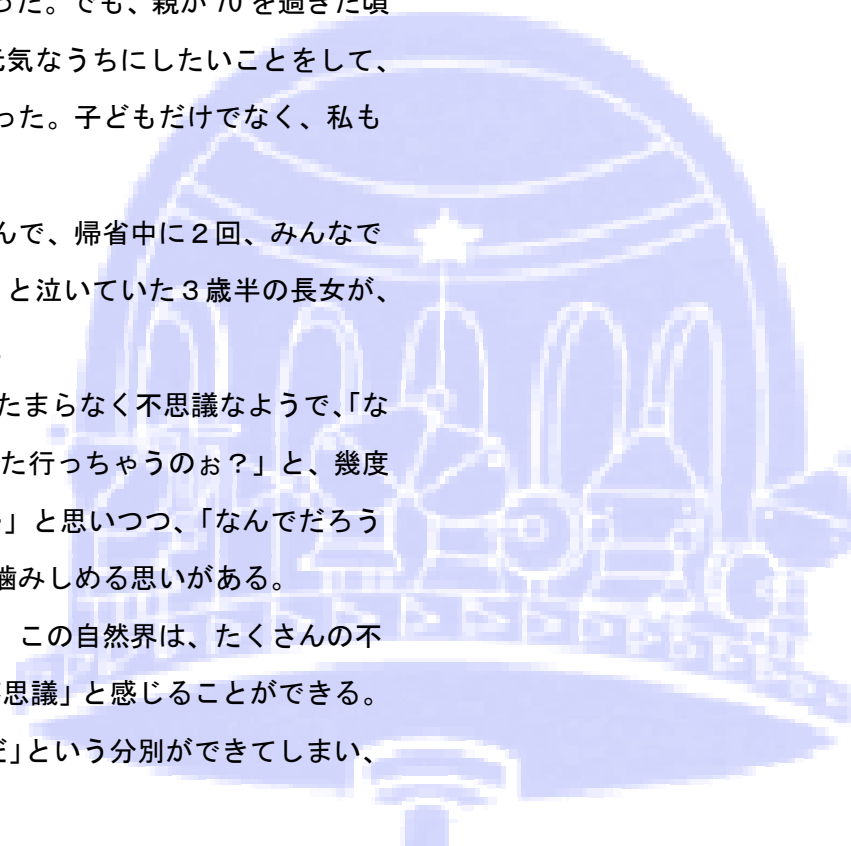
それでも、父は陶芸教室を、母はコーラスを休んで、帰省中に2回、みんなで海に行った。去年は波を怖がって、「もう帰る～」と泣いていた3歳半の長女が、今年は自発的に波に近づいていくからびっくりだ。

繰り返し、繰り返し、よせてはかえす波の動きがたまらなく不思議なようで、「なんで、波がまた帰ってくるのお？」「どうして、また行っちゃうのお？」と、幾度も聴いてくる。「そんなこと、ママに聞かれても…」と思いつつ、「なんでだろうねえ、不思議だねえ」と答えながら、しみじみと噛みしめる思いがある。

そうなのだ。娘の言うとおりの、海の波に限らず、この自然界は、たくさんの不思議で満ちているのだ。幼児の頃だけ、それを「不思議」と感じることができる。けれど、もう5歳くらいになると、「そういうものだ」という分別ができてしまい、当然のこととして受け止めるようになる。

長女が「不思議」を感じられる時間は、もう残りわずかだ。せめて、それまで

の間に少しでも多くの不思議に出逢わせたい。なぜ、雨上がりに美しい虹がかかるのか、なぜ、秋になると葉っぱの色が変わるのか、どうして手のひらに落ちた雪がすぐに溶けて消えてしまうのか。その理由を科学的に理解するのは、大人になってからでいい。



2009年10月号

『キッズニア初体験』

浅田志津子（教育・福祉関係のルポライター）

先週、はじめて家族でキッズニアに出かけた。子どもが好きな仕事を選んで働き、お給料（キッズ）をもらい、そのキッズで買い物や習い事を楽しむ屋内施設である。午後4時、豊洲のらぽーと内にあるキッズニアに到着。全日空、ヤクルト、森永、出光などなど、約50の企業によるユニークなパビリオンが商店街のように並んでいる。ここは「子どもが主役」なので、パビリオン内には子どもしか入れない。親はガラス張りのパビリオンの外側から、我が子が働く姿をじっと、ときにはハラハラしながら見守るのだ。

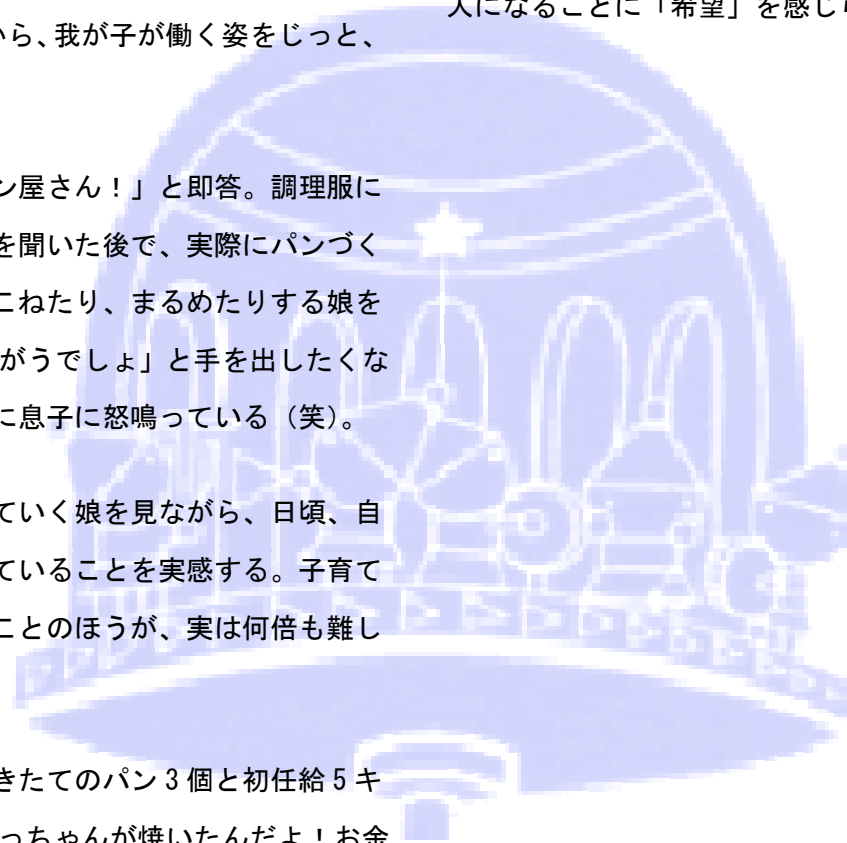
まず、娘にどの仕事を体験したいか聞くと「パン屋さん！」と即答。調理服に着替え、帽子をかぶり、パン屋のお姉さんの説明を聞いた後で、実際にパンづくり開始となる。神妙な顔をして真剣にパン生地をこねたり、まるめたりする娘をガラス越しに見つめながら、ついつい、「ほら、ちがうでしょ」と手を出したくなってしまう。隣のママもおんなじで、ガラス越しに息子に怒鳴っている（笑）。

試行錯誤しつつも、なんとか自力で作業を進めていく娘を見ながら、日頃、自分が必要以上に娘のすることに口や手を出しすぎていることを実感する。子育てにおいては、世話を焼くより、「待つ」「見守る」ことのほうが、実は何倍も難しいのだ。

そして、はじめての「仕事」を終えた娘が、焼きたてのパン3個と初任給5キッズを手に、満面の笑顔でお店から出てきた。「さっちゃんが焼いたんだよ！お金

ももらったよ！」と得意げである。夫と私にもひとつずつくれ、みんなで食べた。おいしかった。

その後も、ピザ屋、花屋などで働くうちに、あっという間に9時の閉館となる。帰りの電車の中、本日の稼ぎ、計20キッズを手に握りしめたまま、娘はすぐに眠ってしまった。その寝顔を見つめながら、いつか娘が本当に社会で働く日のことを思う。現実の仕事は、そう甘くないけれど、それを知るのは、まだ先でいい。子どもの頃に働くことを「楽しいこと」としてイメージできるということは、大人になることに「希望」を感じられるということだから。



2009年11月号

『次女、1歳になる』

浅田志津子（教育・福祉関係のルポライター）

今日、11月11日、次女は生まれてはじめての誕生日を迎えた。夕方には夫の両親が来て、我が家でお誕生会をするため、大雨のなか、次女をだっこひもでだっこし、傘をさしてスーパーに向かう。10.5kgもある次女の、そのずっしりとした重みとぬくもりを感じながら、この1年をふりかえりつつ歩いた。

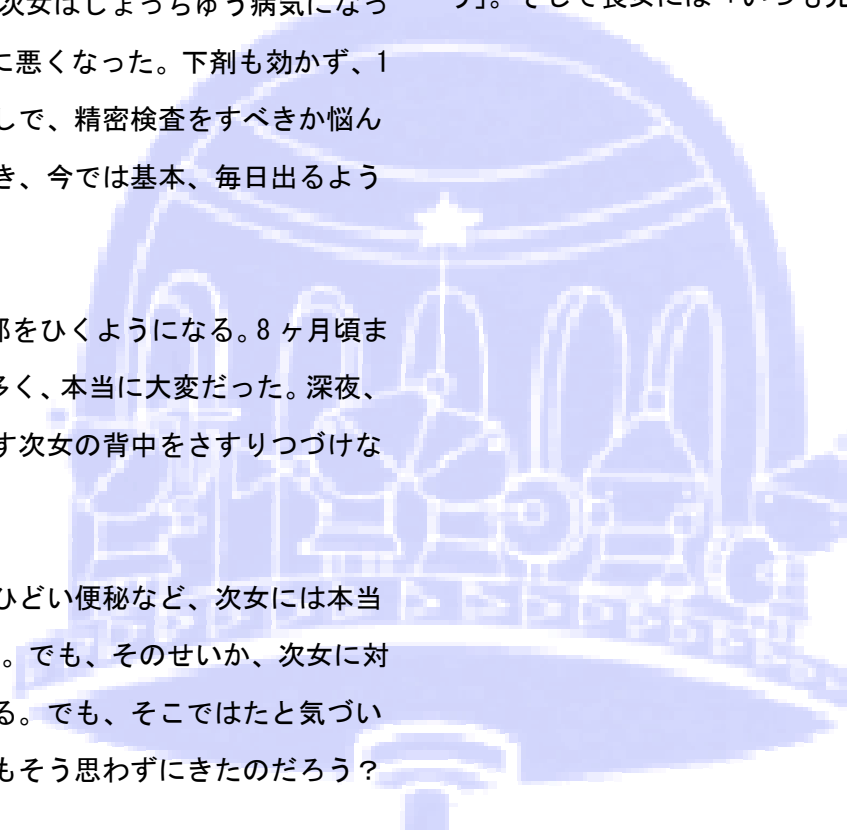
3歳まで、病気知らずで育った長女とは異なり、次女はしょっちゅう病気になってきた。まず、生後2ヶ月半頃からお通じが非常に悪くなった。下剤も効かず、1週間出ないと浣腸をして出すということの繰り返しで、精密検査をすべきか悩んだものだ。幸い、成長と共に少しずつ改善していき、今では基本、毎日出るようになっている。

生後5ヶ月頃からは、しょっちゅう咳を伴う風邪をひくようになる。8ヶ月頃までは、咳こんだ拍子に大量に吐いてしまうことも多く、本当に大変だった。深夜、激しく咳こんで、苦しそうにゼロゼロと喉をならす次女の背中をさすりつつけながら、不安で泣いたこともある。

そのほか、卵へのアレルギー反応や、一時的なひどい便秘など、次女には本当に手がかかり、「ようやく」1歳になった感がある。でも、そのせいか、次女に対しては「元気でいてくれるだけで親孝行」と思える。でも、そこではたと気づいた。なぜ、丈夫な長女に対しては、今まで、一度もそう思わずにきたのだろうか？

次女が生まれてからのこの1年、私は毎日毎日、長女を叱りつづけてきた。やきもちを焼いて、次女が遊ぶおもちゃを取り上げたり、物を投げたりする長女の頭を、バシんとぶったことも一度や二度ではない。そのたびに泣き叫ぶ長女にイラだち、次女をだっこしながら「うるさいっ」と叫んだ。でも、今になって思う。長女だって次女と同じく、「元気でいてくれるだけで親孝行」なのである。けれど病気知らずゆえに、元気でいることが当然のことになってしまっていた。

だから今日は、二つの気持ちを記したい。次女には「1歳のお誕生日、おめでとう」。そして長女には「いつも元気でいてくれて、ありがとう」。



2009年12月号

『はじめての七五三をへて』

浅田志津子（教育・福祉関係のルポライター）

先月、もうすぐ4歳になる長女の、はじめての七五三を祝った。まず、私は朝8時に予約してある近所の美容院に行き、着物の着付けとヘアメイクをしてもらう。その後、車で迎えにきてくれた主人、娘達、夫の両親と共に、写真スタジオへ向かった。

まず、衣装室に入って長女に着せるお着物を選ぶ。はじめての着物を着て、髪もアップにして着替え室から出てきた娘は、親バカながら、やはり愛らしい。姑ときたら、目を細め過ぎて顔全体がとろけてしまいそうだ。はじめに、主役である長女ひとりの写真を何ポーズか撮ることになる。ごきげんに撮影スタッフの指示に従う娘を見守りながら、「おおきくなったなあ」と、親として万感の思いが押し寄せる。

次は全員での撮影だ。長女を真中に立たせて、左右の椅子に舅、姑が座り、後列に私、そして次女をだっこした夫が立った。次女もドレスを着せてもらっているのだが、なかなか髪が伸びず、よく男の子と間違えられる容姿なので、かわいそうだが全然似あってない（笑）。撮影中、前に座る姑と舅の白髪まじりの頭を見ながら、長女が特に大きな病気もケガもせず、ここまで大きくなるのに、ずいぶん二人に世話になってきたなあと思った。

撮影終了後、パソコンの画面で写真を見て、希望する写真を購入する。全員の写真を見つめながら、「私もすっかり『松本家の嫁』って感じだな」と思う。伊

豆の親に会うのは年に1、2回だが、隣り町に住む夫の両親には月に4、5回は会い、子どもを預かってもらい、そのうえ、姑の手作りのお惣菜までもらっている。

写真のなかで、よそゆきの服を着た舅と姑は、着物姿の長女をはさんで、なんとも幸せそうに笑っている。日頃の感謝をこめて、焼き増しを頼む。（焼き増し代1枚4000円×4枚で16000円なり…）。あちこちに見せては孫自慢する姑のうれしそうな顔が、今から目に浮かぶ。

